### 採 Siren 運

第十号



図7:西川祐信筆「伊耶那岐・伊耶那美図」 メアリー・アンド・ジャクソン・バーク財団蔵



図20:西川祐信筆「墨磨り美人図」 フリーア美術館蔵



図22:西川祐信筆「宮詣図」 フリーア美術館蔵



図10:窪田つる・西川祐信『女今川姫鏡』 千葉市美術館蔵

### はじめに

状況を検討する。とに焦点をあて、故実研究が祐信の画事に関与する四―九八〜一七五〇)と絵本を共同制作していたこ四―九八〜一七五〇)と絵本を共同制作していたこ第一の観点として、故実家の多田南嶺(一六九

や書肆と協力しながら挿絵の側面から教養の普及にった。そのような時代の申し子として、祐信は学者村に生きる人々へと出版を通じて普及する時代であ

寄与した。

なかから、上方を基盤とする浮世絵の性質を知る手を捉え直したい。また祐信画の源泉的諸要素を探る関連を視野に置くことで、祐信の作画活動の在り方

## 第一章 祐信と故実

掛かりを提示してゆきたい。

本のなからぬ影響を及ぼしているとも想定できよう。 多数存在する。『国書総目録』に収載される祐信版 多数存在する。『国書総目録』に収載される祐信版 とができるが、そのうちの四種を執筆している人物 とができるが、そのうちの四種を執筆している人物 とができるが、そのうちの四種を執筆している人物 とができるが、そのうちの四種を執筆している人物 とができるが、そのうちの四種を執筆している人物

> を試みたい。 て、祐信の絵本、延いては肉筆画制作の背景の探求第一章では南嶺との合作をひとつの手掛かりとし

(一)多田南嶺について

では『日本書紀神代巻紀釈』『三種神器伝』など、和 刊された著作は少ないが、膨大な数の講義筆録の写 職故実・歌学・神道などに関する研究で、生前に公 くを学ぶ。享保十三年には京都で議席を張り、享保 を修めた国学者である。享保五・六年(一七二〇・一) 坂・京都・名古屋を中心に活躍し、有職故実や神道 は 本が伝来している。例を挙げれば、有職故実関係で らは京都を主な活動拠点とした(註1)。その学問は有 十五・六年には江戸でも講義を行うが、帰京してか 講義を行う。享保十一年頃には、有職の大家である 頃に大坂・長堀に一家を立て、和泉岸和田藩などで 家と親しい関係を結び、有職故実や和歌について多 壺井義知(一六五七~一七三五)へ入門した。堂上諸 はじめに多田南嶺について紹介する。 『故実類聚抄』『武家故実奥義伝』など、 神道関係 南嶺は大

注いだ(註2) 講義筆録が編纂され続け、 巻に関しては、 超える業績が残されている。殊に『日本書紀』神代 があり、書名のみが伝わるものを含めると、 歌関係では『和歌物語』(堂上歌学の秘伝・逸話)など 三十歳前後から最晩年に至るまでの 晩年にはその講義に力を 百種を

留意しておきたい は〈故実〉としないと主張している(註4)。典拠に基 される文献を引用しつつ南嶺の説をまとめたもので 官職・法令などに関する古来のきまり」(『広辞苑』)と 信と合作した絵本の本文にも認められる特色として た。この典拠の提示という姿勢は、 づく「古の事実」が南嶺にとっての ものを〈故実〉といい、 ある(註3)。本書のなかで南嶺は、 之事」など)、その意味や内容、 抄』がある。項目を立て(例えば「誓紙之事」「盟約 記し、写本で伝来する有職故実の筆録に『故実類聚 なものであったのだろうか。 定義されるが、 有職故実とは一般に 南嶺における有職故実とはどのよう 「朝廷や武家の礼式・典故・ 堅い拠りどころのないもの 南嶺の講義を門人が筆 歴史について言及 明確な根拠のある 後に言及する祐 〈故実〉であっ

あった(註8)。

七一〇~九五)の随筆『翁草』でも、八文字屋本の 京都・八文字屋から刊行される浮世草子、 八文字屋本にも筆を染めていた(註5)。 南嶺はこのような学問の世界に身をおく一方で、 神沢杜口(一 いわゆる

> での間、 書かず、八文字屋自笑、其笑、 ものであると見做されている(註?)。 南嶺は実名では けたのか、その経緯は不明であるが、 躍していた南嶺がなぜ浮世草子のような戯作を手掛 掛けていたことに言及している(誰の)。学者として活 長期にわたり八文字屋本浮世草子の新版を南嶺が手 作者・江島其磧(一六六六~一七三五)が歿して後、 て刊行され、いわばゴーストライターのような存在で 七三九) から南嶺歿年である寛延三年 (一七五〇) ま 八文字屋本浮世草子はほぼ南嶺の筆による 瑞笑の作者名を冠し 元文四年(一

> > る

文字屋を版元とする。八文字屋での仕事を介して、 は、 とされる『傾城色三味線』(元禄十四年・一七〇一) る 祐信と南嶺とが結びつく接点が見えてくるのであ 同制作した絵本も、 である。さらに次章でみるように、祐信と南嶺が共 八年・一七二三)も八文字屋の刊行であることが周知 また祐信の代表作である絵本『百人女郎品定』(享保 八文字屋は祐信との関係も深い。 江島其磧の作で八文字屋から刊行されている。 現在確認できた四種はすべて八 祐信の挿絵初作

0

### 究の立場から神谷勝広氏が紹介している(註9)。 (二) 祐信が南嶺と共同制作した絵本につい !が南嶺と共同で制作した絵本四種は、 南嶺研 神谷

祐信

氏は 谷氏の指摘を踏まえつつ、 本雪月花』各々の内容について本文を中心に検 それぞれの本にあらわれる特徴を抽出する。 『絵本西川東童』『絵本花の鏡』『絵本福禄寿』『絵 以下各本の内容を紹介す

### 『絵本西川東童

1

0 0

げられる。 歌 る子供たちが描かれる(図1)。ある事項にまつわる 「天津和尚 は 遊びを主題とする狂歌。 なかにも見られ、 や句を掲出するのは、 簡単な解説を添える。 延享三年 (一七四六) 正月に刊行された(註1)。 「西に入る 画面には楽しそうに人形あやつりに興じ 黄檗宗、 月もあやつり 南嶺にあって参照すべき典拠と 歌学に名あり」と作者名が挙 例えば「子供あやつり」で 『故実類聚抄』 狂句を掲出し、 一世界」の句と、 の項目記述 その作者



図1 多田南嶺‧西川祐信『絵本西川東童』 国立国会図書館蔵

11)、ここでは古歌が参照されている。 のことにて、竹葉をやわらけたる詞なり」とあり(誰 漬にするとのこと也。酒をさゝと申すことは唐土より まれていた。例えば『故実類聚抄』「わさゝと云事」 は、学問的書物のみならず、歌や句もその対象に含 娵にはくれしたなにおくとも〉このわさゝと云 わかきさゝにて新酒と云ことにて、 〈秋なすひ わさゝのかすにつけませ 新酒の糟

反映されている。 そうとする、 説の掲出は、歌や句を挙げて子供の遊びを描き尽く 子供の遊びにまつわる歌・句、 南嶺の 〈典拠〉と〈網羅〉 およびその作者解 への関心が

## ②『絵本花の鏡

聚抄』にも「沼津と云屏風之事」の項があり、 が出たのでこの山を絵にうつして、 れる(註1)。 敷に掛けられた蓬萊山の絵についての知識が披露さ 物のはじまりは……」と、 例えば掛物を題材とする場面(図2)では「漢土かけ や画題の起源などについての評が添えられる(#13)。 立や掛軸など、絵の形状を比べ物風に仕立て、 いうようになったという。沼津絵のことは『故実類 延享五年(一七四八)に刊行された。屏風や襖、 『後漢書』『国史』を引いて述べられ(註13)、 東海道・沼津にむかし名山があり、霊亀 中国と日本における起源 それを沼津絵と 次に座 形状 沼津 衝





国立国会図書館蔵

多田南嶺・西川祐信『絵本花の鏡』

にある蓬萊山のような小山から大亀が出て、 源と来歴が記録されている(誰ほ)。 を屏風にうつしたこと等、 さらに詳細な沼津絵の起 その山

南嶺の故実研究と絵本本文との連動するありさま

### 3 『絵本福禄寿

が、

改めて明らかになるといえよう。

寛延二年(一七四九)正月に刊行された。 内容は事

> 乳母と読ませていると説かれ(註15)、 通という者が優れていること、物縫いの女には十二 に「義髻」とあり、天武天皇の時代にはじまると 添える。例えば「かもじ(髢―婦人の髪に添え加え 物の起源や故事・来歴を記すもので、狂歌・狂句を の作法があること、お乳をやる人のことを国史で る髪)」の起源を述べる箇所(図3)では、 女の祐筆は古来よりあるが、近世では小野のお 乳母がそれぞれ描かれている。 髪結い、 一見して 物縫



図3 多田南嶺・西川祐信『絵本福禄寿』 国立国会図書館蔵

るが、そのことは後に触れる。 この画面は『百人女郎品定』を想起させるものであ

### ④『絵本雪月花

り確実な資料に依拠すべきとする学問観が南嶺の故 記されている。先に典拠を明確に示すべきこと、よ 名花・花垣庄にまつわる故事を『伊賀政事録』を引 えると指摘する (図4)(離灯)。ほかにも伊賀国にある げられている。例えば遊郭などで客が振舞う紙花 く。南嶺の本文では故事の典拠として書名が多く挙 古典風俗双方によって故事の内容や歌意・句意を描 ろに南嶺の学問に対する姿勢が反映されている。 実研究の基を成すことに触れたが、このようなとこ ど、枚挙にいとまのないほど典拠とした書籍名が表 えたり」「神宮雑事記とて伊勢の記録に見えたり」な いて述べたり、「旧記に見えたり」「貞徳の日記に見 た) のことを「仮貨葉」というと『俗語通譯』に見 を作者名とともに添える。祐信の絵は、当世風俗と の巻に、花・月・雪にまつわる故事を載せ、歌や句 (紙纏頭―祝儀として与えた懐紙。後で現金に替えかみばな 宝暦三年(一七五三)正月の刊行。上・中・下各々

作者の狂句・狂歌から多くが採用されている。②個 句を添える作品では、 神谷氏はこれら四種の絵本について、 南嶺の個人的な人脈に繋がる ①狂歌・狂



心に、 と故事が一致する。以上の四点を、①への考察を中 を示す。③故事への執着が強い。④南嶺の他の著述 や役者評判記の登場人物に認められる特徴と同傾向 人的人脈を作品に取り込む姿勢は、南嶺の浮世草子 特徴として指摘している(註18)

歴を過去の文献等に求め、 の事実」を明らかにしようとする南嶺の学問的な関 の密接な関係が認められる。事物の意味や起源・来 南嶺が祐信絵本に執筆した本文をみると、 典拠を拠りどころに「古 故実と

> 問的成果が、祐信絵本の源泉のひとつとなって、絵 文に絵というかたちを与える役目を担う。 るのである。 画制作の方向づけに影響を及ぼしていると考えられ 心が根底にあり、祐信はその南嶺の関心に基づく本 南嶺の学

# (三) 故実と祐信の絵本・絵画

屋と故実との接点が窺える。 様、 推古天皇十九年に男紋女の形など、染色を好ませら と傾倒する故実の探求と同調する姿勢である。 にひろくなりもてゆきて……」と、年号を伴いつつ しけるに、応神天皇十四年に衣服の裁縫はじまり、 国は諸人の衣装もさだまりなく、神代のすゑをうつ には八文字屋自笑の希望で制作したとあり、 服飾の歴史に言及する。これは事物の起源・来歴へ れしより己来、今に至るまでその時~~のはやり模 る記述があるので紹介する。祐信は序文で「往古和 年・一七一三)のなかで、既に故実との関連を窺わせ 八文字屋自笑の依頼で制作した『正徳雛形』(正徳三 先に触れた。南嶺との共同制作ではないが、 場で、八文字屋を活動の一拠点としていたことには ていたこと、また祐信・南嶺ともに共同制作以外の 祐信と南嶺とによる絵本は八文字屋から刊行され 心をつくし手をこめて、さまぐ~の仕出し染世 祐信が 序文

その後、享保八年(一七二三)に八文字屋から刊行

が引かれて起源が述べられる。 内郡人女嬬となる是はじめとかや」と『続日本紀』 百人づつと也。続日本紀に宝亀三年正月に信濃国水 の項目では「めのわらはむかしは内侍の下づかひに 実への関心を想起させる。一例を挙げると「女嬬」 が述べられる。また他の項目でもその身分や職業の 位の始めとす……」など、女帝の起源・歴史・系譜 神天皇のために摂政し給ふ。三十四代推古天皇を即 始めとす。しかれども即位はならず、 例えば「女帝」の項目では「人皇十五代神功皇后を 女中の絵鏡草」(序文)である。添えられた本文の、 の女郎)まで、 と連名で掲出される。本書は女帝から惣嫁(最下級 された『百人女郎品定』は、自笑による序文が祐信 起源や来歴を、文献を根拠に記述する例もあり、故 あらゆる階層の女を網羅した「古今 胎中の御子応

戸

に見られる特徴のひとつであるとともに、 とを指摘している(註19)。 どすべての種類の遊女を網羅して取り上げているこ 年・一七一九)に「太夫」「天職」「端女郎」 などほとん 認められること、さらに祐信の『艶本玉簾』(享保四 の祐信艶本『色ひいな形』(宝永八年・一七一一)にも もいえる姿勢について、白倉敬彦氏は八文字屋刊行 に故実の探求という学問の投影が見えることも指摘 方『百人女郎品定』にみられる〈網羅主義〉と 〈網羅主義〉は祐信の版本 その背景

の項目がある(図5)

立てられ、最終項目近くに「倡妓匪類」として遊女

者、

٤

軌を一にする思潮があるのではない

する百科事典が編纂・刊行される気運の盛り上

上がり

僧侶、 が、 明する一種の百科事典である。「人品箋」すなわち 文 また、医者の分類では「女医」の項目が立てられ、 皇の親族)を筆頭に、皇太后をはじめ、『百人女郎品 上で、その言及箇所が漢文で載る。「帝室戚里」(天 Ļ 七三六)が編纂した類書に『名物六帖』がある(誰窓)。 61 ど、女性皇族だけでも三十近い項目が立てられる。 定』で冒頭を飾った「女帝」「皇后」「后」「姫宮」な 加えた箇所をみると、典拠とする書籍名を明記した 人に関する多様な事柄を分類し、項目ごとに説明を (一七二五)に大坂で発行された。本書は事項を天 『百人女郎品定』刊行の二年後にあたる、享保十年 、時代の類書編纂の気運と一脈通じる点も興味深 地理、人品、器財、動物、植物など十三に分類 身分の高いものから低いものへと、 そのなかに多数の小項目を立て、その内容を説 縫物師、綿匠、商人、乳母など、様々な職種 例えば江戸中期の儒者・伊藤東涯(一六七〇~一 絵師などの技能者、薪売りなどの農業従事 ٤ 〈網羅〉という要素に着目すると、 順次項目が 江

て描く発想の背景には、 女性を身分の高いものから低いものへと 『百人女郎品定』にみられる、さまざまな職種の つまり内容を事項ごとに分類・編集し 享保期に高まるこのような 〈網羅〉し 〈網羅〉



伊藤東涯『名物六帖』より「倡妓匪類」

ものの、 的関心に基づいて描いた画面である。刊行は『百人 南嶺が本文を手掛けた『絵本福寿草』のなかの画 揃」「女祐筆」「お物師」を取り上げた画面(図6)は、 女郎品定』が『絵本福寿草』より二十六年先行する 定』と同じように髪結い、祐筆、おぬいの女を故実 (図3) と図像的に通じ合う。本図は『百人女郎品 また先に言及したが、『百人女郎品定』で「女髪 この共通性は結髪いや祐筆などへの故実的



同『百人女郎品定』 図6-2

とで、この後に興る国生みのダイナミズムが暗示さ



図6 西川祐信『百人女郎品定』 『日本風俗図絵 第三集』より

難題に対して、品格と神秘性とを兼ね備えた抑制的 模様を描く衣装をまとう二神は、 面で、『古事記』『日本書紀』にある神話を題材にし 界をかき混ぜて出現させた島・淤能碁呂島を見る場 が天地の間に架けられた天の浮橋に立ち、 神と女神とを描く図(図7)は、 道研究が反映されていると思われる作例がある。 な姿で表現されるが、二神の視線が鶺鴒に向かうこ の営みを教えた鳥・鶺鴒が描かれる。 る聖なる島であり、首尾を動かすことで二神に聖婚 た作品である。この島は国土創造の営みの拠点とな 絵本以外の祐信の肉筆画制作にも、 伊耶那岐、 神の擬人化という 白地に金泥で 故実研究、 伊耶那美 沼矛で下 男 神

ŋ びつける要因となっているためと考える。 関心が、図像としても両者をひとつの延長線上に結 が窺える のような販売戦略を担うなかで制作を行っていた節 結びつけようとする意図をもって企画し、 けたと確認できないが、八文字屋が故実と絵本とを 『百人女郎品定』は南嶺などの故実家が本文を手掛 ……」など、結髪についての言及がなされており、 を結ふべしと仰せ付けられたり、 の『故実類聚抄』には「女結髪之事」の項目もあ 「髪を結う」ことへの故実的関心の高さが知られる。 「人皇四十代天武の十一年、 国中に触て女の髪 其前は皆下け髪也 また南嶺 祐信もそ

西川祐信筆「伊耶那岐・伊耶那美図」 メアリー・アンド・ジャクソン・バーク財団蔵

的関心との関連を想定する必要があろう。 する研究に力を注いだ。 れるのである。南嶺も殊に『日本書紀』神代巻に関 る作例の背景には、祐信をめぐる故実家たちの学問 このような神話を題材とす

### 章 往来物の制作

第

とつの学問的背景を探ってみたい。 では第二の観点として往来物の制作を通じたもうひ 往来物とは、もともと往返の手紙一対の模範文を 前章では祐信と故実との関連を考察したが、

集めたもので、〈往来〉とは消息の「往来」を意味する言葉であった。始まりは十一世紀の後半に成立した藤原明衡の作と伝えられる『明衡往来』といわれ、多くの写本が残された。中世以降は手紙の文例に限らず、記事文体であっても手本であれば往来物と言うようになる。近世になると、庶民の間で文字の読み書きへの要望が高まり、家庭や寺子屋での学習の際に役立つさまざまな初歩的教材のことを往来りをいい、呼称の範囲が広がった(HECL)。

祐信は往来物の制作にも携わり、現在までのとこれ信は往来物の制作にも携わり、現在までのといった往来物にく進展した往来物研究の成果に負いながら(#23)、として、祐信の画事の背景を探ってみたい。近年著として、祐信の画事の背景を探ってみたい。近年著として、祐信の画事の背景を探ってみたい。近年著としく進展した往来物の制作にも携わり、現在までのとこれには、

# (一) 中村三近子と内藤道有について

究資料館データベース)には『官職名解』など三十数訓書を著した。「日本古典籍総合目録」(国文学研都の町学者として市井にあって多数の実用訓蒙書、後に二年間ほど尾張藩に仕えたがすぐに致仕し、京後に二年間ほど尾張藩に仕えたがすぐに致仕し、京後に二年間ほど尾張藩に仕えたがすぐに致仕し、京後に二年間ほど尾張藩に仕えたがすぐに致仕し、京後に二年で、日本によって生涯

版物の刊行に関与した。三近子と道有はひとつの往

から刊行したり、両者はたがいに親密な関係にあっ来物を共に制作したり、三近子の著作を道有の書肆

種の著作が挙げられ、作家兼書肆として自ら本文を

手掛けるとともに、往来物をはじめとする多数の出

四種の著作が挙げられる。

摘した。 及を、 道徳的観念である〈善念〉(内面的な誠実さ、潔白 町学者として〈俗間〉(庶民の生活環境)にあって、 1, 庶民の実用的知識の需要に対する〈迎合〉でもな かを分析した。そして上からの〈教化〉でもなく、 さ。 目指すユニークな特質をもつ学者であったことを指 によって考察が発表された(註2)。 三近子の思想的特質について、 機能としての相互扶助、 〈俗間〉の心情を尊重しつつ〈善念〉の実現を いかに手習いや往来物を通じて行おうとした 相互憐憫)の実践と普 近年、和田充弘氏 和田氏は三近子が

箱』『女朗詠教訓歌』『扶桑画譜』『女消息華文庫』の五衛』「女朗詠教訓歌」)、内藤玉枝『女消息華文庫』)、晩香散人内藤道有(『扶桑画譜』)、 内藤道有(生歿年不詳)は、植村を名乗ることから、は来物を多数版行した京都の書肆・植村藤右衛門と往来物を多数版行した京都の書肆・植村藤右衛門と往来物を多数版行した京都の書肆・植村藤右衛門と付来物を多数版行した京都の書肆・植村を名乗ることが推測される。「日本古典籍総 内藤道有(生歿年不詳)は、植村玉枝子(『女中庸瑪内藤道有(生歿年不詳)は、植村玉枝子(『女中庸瑪

たと想定される。

の関係を中心に、彼らの残した諸本を検討する。 本信は三近子・道有といった往来物で名を馳せた 学者や書肆たちが形成する輪のなかに、絵師として 学者や書肆たちが形成する輪のなかに、絵師として でおり、三近子、道有、祐信、守国の四者が結ぶ、 ており、三近子、道有、祐信、守国の四者が結ぶ、 であり、三近子、道有、祐信、守国の四者が結ぶ、 でおり、三近子、道有といった往来物で名を馳せた と記録の制作をめぐる、学者や書肆、絵師に よる協力関係が浮かび上がってきた(産気)。以下、そ よる協力関係が浮かび上がってきた(産気)。以下、そ

### (二) 祐信の往来物

ていたことがわかる。 ▼印に挙げた(#E®)。主に女性向けの往来物に携わっ 本信が絵を手掛けた往来物を [資料] ①から③の

例えば『女万葉稽古草紙』は、享保十三年(一七一八)に刊行された女性向けの手紙の模範文例集で、 大繭(離宮)という女性が文例を担当する。女性の祐筆林蘭(離宮)という女性が文例を担当する。女性の祐筆林蘭(離宮)という女性が文例を担当する。女性の祐筆林蘭(離宮)という女性が文例を担当する。女性の祐筆が貴女の傍らで手紙を書くなど、室内の様子を描く 達ざる文章」「同じく返事」など、手紙の文例が各々の返事と一組になって、合計五十六通分が収められる。祐信はこれらすべてに挿絵を描くわけではないる。祐信はこれらすべてに挿絵を描くわけではないが、手紙の内容に添った合計八図の挿絵に筆を執っている。

せ、手に手紙を持って先方へ向かう女性を描く(図は、手に手紙の文例を載せた往来物に『女文林宝袋』には歳末に歳暮を贈る際の文例が載る。居初都音(#28)という女性が撰述し、元文三年(一七三八)に刊行された(#28)。一例として「歳暮年(一七三八)に刊行された(#28)。一例として「歳暮年(一七三八)に刊行された(#28)。一例として「歳暮年(一七三八)に刊行された(#28)という女性が撰述し、元文三年に手紙の文例を載せた往来物に『女文林宝袋』また手紙の文例を載せた往来物に『女文林宝袋』また手紙の文例を載せた往来物に『女文林宝袋』

『女今川姫鏡』は「女今川」(今川貞世の『今川帖』『女今川姫鏡』は「女今川」(今川貞世の『今川帖』で大夕川姫鏡』は「女今川」(今川貞世の『今川帖』に擬えて貞享四年〈一六八七〉に刊行された女性向に擬えて貞享四年〈一六八七〉に刊行された女性向に擬えて貞享四年〈一六八七〉に刊行された女性向に扱えて貞享四年〈一六八七〉に刊行された女性向

9

往来物に挿絵を提供していた。 住来物にはさまざまな種類があり、以上確認した を組んだ往来物に挿絵を描くこと を組んだ往来物に挿絵を描くこと と組んだ往来物に挿絵を描くこと と組んだ往来物に挿絵を描くこと

# ①中村三近子との共同制作

[資料]②に挙げた。 祐信が中村三近子と組んだ絵本、また往来物は

まじきは無常成けり」、左丁に「正直のかうべなけ

随所に引用されていることが指摘されている(its)。 遠所に引用されていることが指摘されている(its)。 最明寺殿和歌と称するものが存在し、仮名草紙類の 最明寺殿和歌と称するものが存在し、仮名草紙類の 最明寺殿和歌と称するものが存在し、仮名草紙類の 最明寺殿和歌と称するものが存在し、仮名草紙類の 最明寺殿和歌と称するものが存在し、仮名草紙類の 最明寺殿和歌と称するものが存在し、仮名草紙類の 最明寺殿和歌と称するものが存在し、仮名草紙類の

描く。

らしく、同じく最明寺殿和歌をもとにした続編『絵 教訓が書き添えられている。この趣向は好評だった 義あらば、用心けんごなるべし」と歌から導かれる をまぎれに盗賊悪党の難やあらん、ゆかでかなはぬ 出を戒める歌が載る (図12)。左丁の頭書には「夜陰 る用もなきにただ かろくありかむことをとどめ 絵をつけたと書かれる。一例を挙げれば、右丁に 三近子の序文では、最明寺殿和歌に祐信が当世風の して右丁に「前果にて冨たつとめる中とても 歌とその内容に沿った絵のみで構成される。一例と れた。こちらは三近子による教訓は書き込まれず、 本池の心』が五年後の元文四年(一七三九)に刊行さ よ」という、変わった服装をしないことや、 つねの 装束をせよ」、左丁に「夕ぐれに さした 「着る物も 人にかはるは むようなり ただよの 夜の外 忘る

は無常を思う貴人、宮参りに詣でる人々をそれぞれ各々の歌に絵を付した場面を挙げた(図13)。画面でれば神達の「やどり所のすくなかるらむ」という、

なお教訓歌を百首選び心得とする「教訓百首型」ともいうべき分野は、『絵本池の心』『絵本清水の池』ともいうべき分野は、『絵本池の心』『絵本清水の池』ををとるが、内容には人々を教え論す往来物の意図ちをとるが、内容には人々を教え論す往来物の意図が反映されている。

本書に祐信と三近子との往来物に、寛保元年(一七里た祐信と三近子との往来物に、寛保元年(一七里た祐信と三近子との往来物に、寛保元年(一七里た祐信と三近子との往来物に、寛保元年(一七里た祐信と三近子との往来物に、寛保元年(一七里た祐信と三近子との往来物に、寛保元年(一七里た祐信と三近子との往来物に、寛保元年(一七里に表述。 内容は百人一首の歌仙絵を中心として、道徳規範、和歌十体の解説、賢女の故事など、女性が徳規範、和歌十体の解説、賢女の故事など、女性が徳規範、和歌十体の解説、賢女の故事など、女性が徳規範、和歌十体の解説、賢女の故事など、女性が徳規範、和歌十体の解説、賢女の故事など、女性が高い、寛保元年(一七里の一)の刊記をもいる。

# ②内藤道有との共同制作

香散人を号とする内藤道有が編纂にあたる。はじめ朗詠教訓歌』は、序文に晩香散人玉枝撰とあり、晩ておきたい。宝暦三年(一七五三)に刊行された『女次に祐信と内藤道有との共同制作[資料]③をみ



図9 居初都音·西川祐信『女文林宝袋』『往来物大系92』より



図8 林蘭·西川祐信『女万葉稽古草紙』 国立国会図書館蔵



図11 中村三近子・西川祐信『絵本清水の池』口絵 国立国会図書館蔵



図10 窪田つる・西川祐信『女今川姫鏡』 千葉市美術館蔵



図13 西川祐信『絵本池の心』 国立国会図書館蔵



図12 同『絵本清水の池』 国立国会図書館蔵



図15 内藤道有·西川祐信『女朗詠教訓歌』 『江戸時代女性文庫100』より





図14 中村三近子・西川祐信『女世宝要袋』 神宮文庫蔵

五日なご前刃の白米、三上六次山の次人の召介、ま絵入で説かれ、そののちに、正月や三月三日、五月に、仁、義、礼、智、信という守るべき道徳規範が

家のなかが栄える」と教訓を導き出す。また和歌・ となって栄え、さそう水も蒼海の宝を生むように、 うとする者がいるが、貧富というのは宿命のような なると、人を羨み、夫と離別して自分を幸せにしよ て小町が詠んだ歌で、こんなに侘しい我が身なの が赴任した土地に小野小町を誘った際に、返事とし んとぞおもふ」が掲出される。この和歌は文屋康秀 をうきくさの に挙げると(図15)、古今集に載る「わびぬれば 五日など節句の由来、三十六歌仙の歌人の紹介、ま 挿絵とともに書かれる。 注釈と平行して、頭書に和漢の賢女・貞女の故事が せば、天からの恵があり、根の絶えたうき草も樹木 ら、舅、姑、夫によく仕えて、女性としての徳をな ら教訓を引き出し、「妻のなかには夫の家が貧しく 流れて行くという意味をもつ。注釈ではこの和歌か で、誘う水があるのなら、浮草のようにどこへでも ら読み取れる教訓が書かれる。小野小町の和歌を例 た手紙の文例、教訓が説かれたあと、和歌とそこか 人の力ではどうすることもできないのだか 根をたえて さそふ水あらば いな 身

図載るほかは、文字のみで構成される

はどのような人物であったのか、さらに別の版本か容とする往来物の例をみてきたが、三近子と道有と格信が三近子・道有と組んで制作した、教訓を内

ら検討を加えてみたい。

# 祐信との共同制作が確認できる三近子と道有は、(三)中村三近子・内藤道有と往来物

刊行した往来物を[資料]④に挙げた。 がいに親密な関係にあった。三近子と道有とが共同道有の版元・植村藤右衛門が刊行したり、両者はた共にひとつの往来物を制作したり、三近子の著作を共にひとつの往来物を制作したり、三近子の著作を

る。 三近子は「書筆」という裏方的な役割を負ってい しい教戒を探し、書き贈った内容をもとにしたもの 幼女の教えになるようにと、漢籍から女子にふさわ されており(註33)、本書などは共同制作といっても、 近子」とあり、三近子が「書筆」として関与してい 確かであるが、「画図 漱石子、全部書筆 中村三 ている。 という。 る。三近子は筆耕の境遇に甘んじていたことが指摘 「植村玉枝子編述」とあり、道有が編述したことは か、事物の起源の解説などが書かれている。 訓にして記す。さらに頭書には貞女の故事などのほ に刊行され、嫁・姑のそれぞれの心得を十か条の教 『女中庸瑪瑙箱』は初版が享保十五年(一七三〇) 道有の跋文によれば、 絵は橘守国、 長谷川光信、漱石子が担当し 彼の叔父が在世中に家の 本書は

分に応じた用文の文例や関連する言葉などを載せた三近子による『四民往来』は土農工商、各々の身

祝儀門、 梓」とあり、玉枝軒、つまり内藤道有の蔵版、 版本が植村藤次郎から、寛延三年(一七五〇)に再版 男性に向けた往来物で、享保十五年(一七三〇)に初 に が確認できる。絵は初版本が長谷川光信、再版本は 枝軒蔵版」、寛延三年版に「皇都書林 三近子の名と並んで享保十五年版に「洛陽書林 に分類して手紙の文例が挙げられる。例えば佳節門 本が植村藤右衛門から刊行されている。見返しには 部改定箇所のみを橘保国(註3)が手掛け、 また『一代書用筆林宝鑑』も三近子の編纂による 「火事見廻状」などが載る。また頭書には和漢 「年始披露状」、 宮室門、遊興門、 遊興門に 寺社門、 「舟遊びの文」、 凶儀門など十門 植村玉枝軒 佳節門、

であったことが判明してくる。 力者であり、植村藤右衛門のもとでの有力な書き手 た、特に三近子は往来物の作者として博識を誇る実 で往来物を出版するなど、緊密な関係にあった。 祐信との共作がある三近子と道有は、 類語、 用語などが載り、内容は充実する。 ともに組ん ま

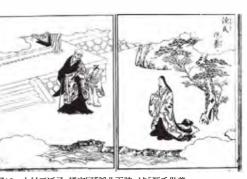
# 中村三近子・内藤道有と画譜

# 橘守国『謡曲画誌』『扶桑画譜

の本文を中村三近子が、また同じく守国の『扶桑画 譜』の本文を内藤道有が手掛けているのである([資 ながりがあった。橘守国が絵を描いた このふたりの往来物作者・版元は、絵画と深いつ 『謡曲画誌』

説が付され、絵もひとつの謡に対応して見開きで二 る。「高砂」「井筒」「松風」など、謡ごとに詳しい 著で、各巻に五番ずつ、合計五十番の謡が収められ の解説とその内容をあらわす絵から成る全十巻の大 図が掲載されるなど、行き届いた内容をもつ。 享保十七年(一七三二)刊行の 『謡曲画誌』 は、 謡

「源氏供養」の舞台となり、 供養」は、紫式部の霊が石山寺へ詣でた安居院法印 :の霊が安居院法印に供養を願う場面(図16)と: 例として「源氏供養」の絵と文を挙げる。「源氏 光源氏の供養を乞うというもので、 また紫式部が 絵では紫式 『源氏物



どが説明されている(註5)。

ほかに四十九の謡に対し

や文章で述べたもの)を取り入れて作られたことな

安居院法印の書いた源氏供養の表白 (言葉

描かれる(図17)。三近子による本文では、

紫式部の

『源氏物語』執筆の経緯、

また謡曲

を執筆したという伝承で著名な石山寺の景色が

東北大学付属図書館狩野文庫蔵

謡に対する博識ぶりが示される。

同じ形式で絵と文が加えられており、三近子の

絵・歌意絵の画譜で享保二十年(一七三五)に刊行さ

『扶桑画譜』の共同制作を行っている。 また橘守国は、三近子のみならず、

内藤道有とも これは詩意

れた。道有による序文によれば、粉本の乏しい画

た画譜に倣って、この画譜を編纂したとある

だった橘守国に特に要請して、

明の葵冲寰が作成

のため、

また子供の詩歌学習用に、

当時すでに有名



同『謡曲画誌』より「源氏供養 石山寺の景

図16 中村三近子・橘守国『謡曲画誌』より「源氏供養」

眺める貴人。山深い渓谷の、 この歌が心細く物寂しい景色を詠んだものと解説さ ぼそきに、 たび人の行くらし、夕日さびしき梯のほとり、 し」の画面を挙げる(図18右)。解説には ふきかへす、秋かぜに、夕日さびしき、 物あはれなる景なるべし」と書き添えられて 例として、藤原定家の「羇旅」の歌 「行き暮らすとは」旅の途中で日が暮れること 夕日を向こうにして、 秋かぜのつよく吹て、 おそらく紅葉におお 橋を渡る人々、 袖ふきかへすさ 山のかけは 「旅人の袖 「歌の心、 それを 物心

れた秋景の悲しさを、 画譜の絵が伝えてい

解くものである(註36)。 う場面である。 に鶯が止まり、 香を焚き寝台に横になるが、枕元の窓の外に咲く梅 る詩が載る。 よる本文は漢詩を補って、 分を仕女図の伝統を踏まえ中国風俗で描く。 慨に耽る物憂い気持ちで、守国はこの漢詩が促す気 の内容を写した絵が付される(図19)。美しい女性が び起して夕陽に対す」の詩とその解説 (図18左)、詩 て枕屏香ばし 無情の鶯舌 家の「羇旅」につづき「春怨詩図 同じく『扶桑画譜』 「華影重々として綺窗に畳む その囀りによって夢から醒めるとい 全体に漂う気分は では漢詩も取り上げられ、 春夢を驚かす 詩の意味をわかりやすく 「春怨」つまり感 朱氏」と題され 篆烟飛上 愁人を喚 道有に 定

が、五巻合計で八十六種載る。この画譜を編纂した 各々歌意と詩意とに解説を加え、 『扶桑画譜』にはこのように、 三近子と並ぶ教養人であった。 和歌と漢詩を載せ、 絵を付したもの

七四〇) に、『画本鶯宿梅』は守国ひとりの手によっ の公刊が予定されていた。 梅』が守国と祐信との合作で、 『本朝画苑』『和漢画本武者袋』と並んで、 類の目録が掲載されている(#ホア)。橘守国の筆になる さらに奥付部分には、今後刊行される予定の画 『扶桑画譜』 の刊行から五年後の元文五年(一 しかし計画通りには実現 全十冊という大著で 『画本鶯宿



大阪府立中之島図書館蔵

同『扶桑画譜』より「春怨詩図」

内藤道有・橘守国『扶桑画譜』より「羇旅」、「春怨詩図」

たことがわかる。

そして祐信が、

往来物刊行をめぐ

た画譜編纂・刊行にも版元として意欲をもって

る輪のなかに存在していたこと、

三近子・道有とい

享保期 (一七一六~三六) は近世往来物史のな

明らかとなる。

形成していた関係の輪のなかに存在していたことが

った作者、また作者兼版元と、守国など絵師たちが

者がその詩歌や謡などに対する博識ぶりを発揮し な人間の在り方のイメージを絵にする。 人々が共有していた教養、 往来物の制作者と絵師とが深く関わり、 画譜の編纂にテキストの面から関与すると 理想的な暮らし、 あるいは作 理想的 当 時 0

代を告げる往来物の担い手たちであった

るようになった。三近子や道有は、そのような新 同時代に生きる学者・書家が往来物の制作に参入す な内容が要請されるようになり、新興の作者として

る場合が大方であった。

(例えば弘法大師、

小野篁など)に作者を仮託す

に即した消息や語彙、

教訓を編纂した、より実用的 しかし享保期頃から、

生活

の往来物は、原作者と見做される歴史上の著名な人

であると考察されている(註3)。その特徴のひとつと

作者の在り方の変化が挙げられる。それまで

前時代とは

線を画す新傾向があらわれた時期

て植村藤右衛門から刊行された(註器)

道有は往来物の刊行とともに、

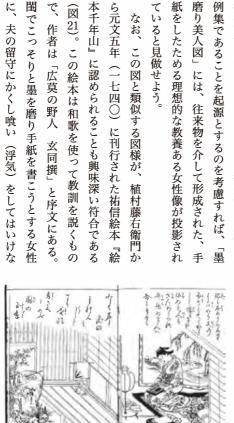
守国や祐信を登用

が う、 思 連の検討のなかに認められるのである 想や教養と、 絵画との間に生じる相関関係

### 豆 祐信絵画の源泉としての往来物

「宮詣図」「墨磨り美人図」

磨り美人図」には、往来物を介して形成された、手 例集であることを起源とするのを考慮すれば、 方の手本を示し、口絵などで優雅に手紙を書く女性 うえでの大切な嗜みと見做され、文例を挙げて書き 無縁ではない。往来物では、手紙が人間関係を築く ていると見做せよう。 紙をしたためる理想的な教養ある女性像が投影され 往復書簡の意味であったことや、往来物が手紙の文 の姿が描かれてきた。〈往来〉が、もともと手紙の の図様は、往来物のなかで培われた女性イメージと は女性が手紙を書こうと墨を磨るところを描く。 てゆきたい。祐信の肉筆画「墨磨り美人図」(図20) つづいて祐信における往来物と絵画との関連をみ



で、作者は「広莫の野人

西川祐信『絵本千年山』 国立国会図書館蔵



図20 西川祐信筆「墨磨り美人図」 フリーア美術館蔵



林蘭•西川祐信『女教文章鑑』 図23 『江戸時代女性文庫・補遺4』より



図22 西川祐信筆「宮詣図」 フリーア美術館蔵

いと諭す。

また、お宮参りを描く「宮詣図」(図2)も、おそらく往来物を介して醸成されたであろう、女性の理らく往来物を介して醸成されたであろう、女性の理想的な暮らしのひとこまを切り取った図様である。 は来物で共有された生活感覚が、肉筆画図31左)。往来物で共有された生活感覚が、肉筆画図13左)。往来物で共有された生活感覚が、肉筆画図13左)。往来物で共有された生活感覚が、肉筆画図13左)。往来物で共有された生活感覚が、肉筆画図13左)。往来物で共有された生活感覚が、肉筆画図13左)。

### おわりに

の図様を生み出す源泉のひとつともなっていた。本稿では西川祐信の絵本・往来物が制作される背景を探り、祐信が同時代に活躍した学者たちと共景人像の源泉のひとつには故実的な関心に基づくテ美人像の源泉のひとつには故実的な関心に基づくテ美人像の源泉のひとつには故実的な関心に基づくテ美人像の源泉のひとつには故実的な関心に基づくテナストが介在し、また往来物を通じて培われた理想的な女性の在り方が投影されていた。それは肉筆画的な女性の在り方が投影されていた。

識人〉の蔵書目録がいっせいに出てくるのが享保期 主等が存在し、彼らのまわりには、その教授を受け や庄屋などの上層農民、 知》 力の側からも儒教の徳目や教養理解のための手習い が編纂・刊行されたのに象徴されるように、将軍権 に、室鳩巣が仮名交じりの平易な文に改めたもの。 「六論」を清の范鋐が解説した『六論衍義』をもと の命で『六論衍義大意』(明の太祖が発布した教訓 したこと、などである。享保七年 (一七二二)、吉宗 であること、俳諧や謡が下層農民にまで急速に浸透 る子供や農民が広汎な裾野を作っていたこと、〈知 の状況を指摘する(註4)。 村の〈知識人〉として名主 「孝順父母」「尊敬長上」など六つの徳目が説かれる) 徳川吉宗の治世下、享保期の村落社会における の享受について、 横田冬彦氏が興味深い当時 医師、寺子屋師匠、 神

この『六論衍義大意』の注釈『六論衍義小意』を享保十六年(一七三一)に刊行したのが中村三近子である。祐信はまさに時代の〈知〉と連関しながら、ある。祐信はまさに時代の〈知〉と連関しながら、とで教養の普及を担った十八世紀前半期の申し子のような絵師であった。

が奨励された。

描かれた浮世絵とは何を要因に生み出されたのか、例を深く掘り下げるまでに到らなかったが、上方で本稿ではその輪郭を辿るだけに留まり、各々の事

村に生きる人々へ出版を通じて普及する時代であっ

に支えられた教養が上層階級のみならず、

祐信が活躍した十八世紀前半期は、

学問的な成果

市井や農

という問いに対する僅かな手掛かりとなれば幸いで

ある。

註

- 二年)を参照した。
  二年)を参照した。
  二年)を参照した。
  一年、方面、
  一年、
  一年、
- 会、平成九年)解題を参照。 風間誠史『叢書江戸文庫四十二 多田南嶺集』(国書刊行
- れる。本稿ではその翻刻を参照した。『故実類聚抄』の翻刻は、古相氏論考 (前掲註1) に収載さ

3

4

2

- 『故実類聚抄』の該当箇所は以下の通り〈故実の事〉……『故実類聚抄』の該当箇所は以下の通り〈故実の本えて、故実とは云へからす……」「古相氏論考(前掲註1、二五九頁)」。一般的に有識故実とは公家有職、武家故実の総称とされるが、古相氏はこの項に言及したうえ、南嶺自身は自らの著作に対して「有職」の語は用いず「故実」の語を用い、その内容は武家故実に限るものではなく、典拠を引くべきものは全て「故実」と考えていたと指摘する[古相氏論考(前掲註1、二五十六頁)]。本稿でも南嶺の概念に従い「典拠に基づく古の事実」として「故東拠を引くべきものは全て「故実」の語は用いず「故実の事〉……
- 楓社、昭和四十四年)において指摘、考察される。録)、②長谷川強『浮世草子の研究』第四章 第一節(桜録)、②長谷川強『浮世草子の研究』第四章 第一節(桜録)、②中村幸彦「多田南巓の小説」(初出・昭和十五年/『中村
- は其磧をも圧り、中にも鎌倉袖日記などは、幾度見てもに不劣、而も当世の気を呑み込て書く故に、物によりてりしを、南嶺之を書き初めてより、をさく〜其磧が筆法年々の新板もの、作者其磧死して後は、墓々敷作者も無年会の新板もの、作者其磧死して後は、墓々敷作者も無年の道り。「扨八文字屋自笑が

6

論文、前掲註5①、一二六頁)。 正直氏が初めにこの記事に言及したと指摘する(中村氏の噂続」歴史図書社、昭和四十五年)。中村幸彦氏は関根独笑する佳作なり……」(『翁草』巻百六「享保年間洛俳諧

7 中村氏論文 (前掲註5①)

8

年六月号)

「多田南嶺生」解題(前掲註2)を含め、風間氏による『多田南嶺生』解題(前掲註2)を参照。また南嶺と八文字屋田南嶺集』解題(前掲註2)を参照。また南嶺と八文字屋田南嶺集』解題(前掲註2)を参照。また南嶺と八文字屋田南嶺生』第八十巻第五号〈九五四号〉、1000年前,1000年前,100

16

号、同志社大学国文学会、平成十六年十一月)9 神谷勝広「多田南嶺と絵本」(『同志社国文学』第六十一

17

- 11 『故実類聚抄』古相氏論考(前掲註1、二〇三頁) 宣祐信絵本書誌』(青裳堂書店、昭和六十三年)を参照。 10 祐信絵本の書誌は、松平進『日本書誌学大系五十七 師
- 掲註2)に収載される。 12 『絵本花の鏡』は『叢書江戸文庫四十二 多田南嶺集』(前11 『故実類聚抄』古相氏論考(前掲註1、二〇三頁)

13

- 載で明なり」

  「漢土かけ物のはじまりは漢の該当箇所は以下のとおり。「漢土かけ物のはじまる。国史に見る。日本にては天平宝字の比にはじまる。国史に見るたり。日本にては天平宝字の比にはじまる。国史に見えたり。日本にては天平宝字の比にはじまる。国史に見えたり。「漢土かけ物のはじまりは漢の該当箇所は以下のとおり。「漢土かけ物のはじまりは漢の
- に是を沼津絵のはじめとす」
  道沼津にむかし名山有て霊亀出たり。此山をうつして世土、熱田、いつく嶋などをいへども、絵にうつすは東海該当箇所は以下のとおり。「日本にて蓬萊山といふは富

14

れとも瀧野と云氏にて、東海道沼津の者にて、沼津の脇絵の屏風師なれとも、あれか本姓は、其身は知るましけ15 該当箇所は以下のとおり。〈沼津と云屏風之事〉「中古の町

24

- 行やらで 花にかけたる ぬれむつき」 行やらで 花にかけたる ぬれむつき」 でおいる場所に以下のとおりて、天武天皇の御時よりはじまは、令義解に義馨とありて、天武天皇の御時よりはじまは、令義解に義馨とありて、天武天皇の御時よりはじまな、令義解に義馨とありて、天武天皇の御時よりはじまな、当時にはいるかもじといる物
- 18 神谷氏論文(前掲註9)

19

- 号) と鑑賞』第七十一巻十二号、至文堂、平成十八年十二月と鑑賞』第七十一巻十二号、至文堂、平成十八年十二月と鑑賞』第七十一巻十二号
- 書店、昭和五十四年)書店、昭和五十四年)
- 十三年)に詳しい。 は来物の成立と展開』(雄松堂フィルム出版、昭和六郎『往来物の成立と展開』(雄松堂フィルム出版、昭和六社、平成四年~六年)各期の序文を参照。また②石川松太年、代文学、日本の概要は、①石川松太郎監修『往来物大系』(大空

21

20

社、平成八年~十年)の刊行に代表されるように、往来平成六年~十年)、『稀覯往来物集成』(全三十二巻、大空平成四年~六年)、『江戸時代女性文庫』(全百巻、大空社、影印本を集大成した全集『往来物大系』(全百巻、大空社、

22

物をめぐる研究は近年著しく進展している。

23

- 室、昭和四十八年) 第五集』早稲田大学暉峻康隆研究世文芸 研究と評論 第五集』早稲田大学暉峻康隆研究実談」(『戯作研究』中央公論社、昭和五十六年/初出『近年野三敏「静観坊まで――談義本研究(五)、十五、児戯
- 号、日本教育史研究会、平成十八年八月)三近子を事例として ――」(『日本教育史研究』第二十五和田充弘「近世往来物作者における庶民教育論 ――中村

25

- 本稿は版画研究会(平成十七年七月二十九日)において発表した「西川祐信と版本――十八世紀前半の学問史との 関係から」の内容に基づくが、三近子が道有、祐信、守 国らと共同で活動を行っていたことは、和田充弘氏も三 近子研究の立場から、近世学問都市京都研究会(「近世往 来物作者における手習と学問――中村三近子を中心に」 平成十七年七月一日)の発表で指摘している(http://www.ritsumei.ac.jp/-mit03437/coe/reikai/reikai20050701. htm)。また中野三敏氏は三近子が絵本類に関わった例と して、『最明寺殿教訓百首』及び『絵本池の心』(共に祐 信)、『謡曲画誌』(守国)を挙げている(中野氏論文、前 信)、『謡曲画誌』(守国)を挙げている(中野氏論文、前 掲註23)。
- 『国書総目録』を参照のうえ諸本を確認した。

- 満される (小泉氏論文、前掲註27、七二頁)。 お信の挿絵を入れた改題本であることが指元禄三年 (一六九○) に刊行された『女書翰初学抄』の一
- 文庫一八〇、昭和三十七年、二三四頁) 池田廣司「西明寺殿百首」解題(『中世近世道歌集』古典

30

29

向上社、昭和四十年)、伊藤嘉夫「異種百人一首(三)――藤巌夫「教訓歌について」(杉山一與編『日本社会史論集』31 石川氏論考(前掲註21②、六三頁)。教訓歌については斎

照。 第八号、昭和四十八年)、木野主計「往来物より見たる道第六号、昭和四十八年)、木野主計「往来物より見たる道第六号、昭和四十八年)、木野主計「往来物より見たる道道歌・教戒に関するもの――」(『跡見学園女子大学紀要』

では、「日本のでは、「日本のでは、「日本のでは、「日本のでは、「日本ので、一世、「日本ので、一世、「日本ので、一世、「日本のである」とが、「日本のである。」、「日本のである。」、「日本のである。」、「日本のである。

32

36

和田氏論文(前掲註24、五頁)

34 33

本書二丁表の絵師名記載と奥付には「橘国保」とある。 
「守国男橘国保」、同書安永六年(一七七七)版に「故橘守国男橘国保」は「保国」の誤りと見られる。なお、あるいは「国保」は「保国」の誤りと見られる。なお、あるいは「国保」は「保国」の誤りと見られる。なお、あるいは「国保」は「保国」の誤りと見られる。なお、あるいは「国保」ともある。 
「福国保」とは『難波丸綱目』延享五年(一七四八)版に「林国保」とは『難波丸綱目』延享五年(一七四八)版に「橘国保」とある。

37

35

38

三近子による本文は次のとおり。〈源氏供養〉「紫式部は初 名を紫式部と賜ふ。時の人、日本紀局と称す。源氏物語 語を以て最上とす。就中、紫の巻の詞、絶妙なるとて、 を以て真とす。古へより国字粧紙多しといへども、此物 は八月十五夜なるとあり。其言荘子が寓言にならひ、仮 うかみ奉にまかせて、作り出せり。故に須磨の巻に今夜 自然と須磨明石の二巻を作り物しより、残りの巻々心に 山寺に籠り、観音寺に祈誓しけるに、八月十五夜にて、 る事なれば、何を便に作るべきとも思はざりしかば、石 奉れとのたまへば、式部当時の面目と思へども、新に作 などの物語はめなれ玉ふべければ、新しき草紙語り出し 御方へ珍らしき草紙あらば見侍らんと、御使あり。 台一心三観の血脈をきはむ。或時、斎宮より上東門院の も数多亘り、深き理をも理会しゑて、仏経にも通じ、天 の官女也。幼より心明達、和歌の道に長じ、和漢の書に の名、藤式部といふ。越前守為時が女にして、上東門院 秋水漲来舩去速、夜雲収尽月行遅と、心を澄しけるに、 て式部をめされ、斎宮より爾々の作あり、うつぼ、竹取 やが

それを以て此謡を作るといふ」の伝にして、深き心ありとしるべし。源氏供養の事は、の伝にして、深き心ありとしるべし。源氏供養の事は、六十帖と申せども、今宵所は五十四帖なり。これは和歌

道有による本文は次のとおり。「詩意は春は惣じて女の感道有による本文は次のとおり。「詩意は春は惣じて女の感覚したぞ、扨ゝ、心なき鶯かな、いろへたるまどの中へ、花を畳み入て、置やうなぞ、よいろへたるまどの中へ、花を畳み入て、置やうなぞ、たいろへたるまどの中へ、花を畳み入て、置やうなぞ、やしき、頻に鳴て夢を覚したぞ、扨ゝ、心なき鶯かな、かしと、頻に鳴て夢を覚したぞ、扨ゝ、心なき鶯かな、かしと、頻に鳴て夢を覚したぞ、扨ゝ、心なき鶯かな、なかずど永く夢を結ばせよとのこころなり」

年三月)に考察、指摘される。年三月)に考察、指摘される。 (法野秀剛氏はこのことを指摘した上で、祐信が河内屋宇浅野秀剛氏はこのことを指摘した上で、祐信が河内屋宇浅野秀剛氏はこのことを指摘した上で、祐信が河内屋宇浅野秀剛氏はこのことを指摘した上で、祐信が河内屋宇浅野秀剛氏はこのことを指摘した上で、祐信が河内屋宇浅野秀剛氏はこのことを指摘した上で、祐信が河内屋宇浅野秀剛氏はこのことを指摘した上で、祐信が河内屋宇

39

『日本史講座』六』東京大学出版会、平成十七年)横田冬彦「近世の学芸」(歴史学研究会・日本史研究会編

40

記した。 『題』・作者(刊記名)/絵師、刊行年、書肆、底本。備考の順に

■印は画譜。 ▼印は祐信の絵による往来物、◆印は祐信画以外の往来物、

●印は絵本。絵本の書誌は松平進『師宣祐信絵本書誌』(青裳 昭和六十三年)を参照

内容。

## 西川祐信の往来物

享保十三年(一七二八)、山口茂兵衛、国立国会図書 『女万葉稽古草紙』林蘭 (林氏蘭女) / 西川祐信、

九』(大空社、平成七年)掲載本。 七二九)、山口茂兵衛、 ▼『女家訓』保井恕庵/西川祐信、享保十四年 (一 『江戸時代女性文庫 三十

『女書翰初学抄』 れた改題本 の謙堂文庫本。元禄三年 (一六九〇) に刊行された 衛、『往来物大系 九十二』(大空社、平成六年) 掲載 ▼『女文林宝袋』居初都音〈津奈〉(居初氏女筆 /西川祐信、元文三年(一七三八)、銭屋庄兵 の一部を改刻し、祐信の挿絵を入 都

> 衛、 祐信女重宝記』(国立国会図書館本、刊記なし)も同 蘭女) / 西川祐信、寛保二年 (一七四二)、菊屋喜兵 ▼『女教文章鑑』(別名:『女文章稽古』) 林蘭 (林氏 年) 掲載本。 『女万葉稽古草紙』 の改題本。 『西川 『江戸時代女性文庫 補遺四』(大空社、平成十

年)掲載本。 衛、『江戸時代女性文庫 八十六』(大空社、平成十 品 ▼『女要文通筆海子』長谷川品 (筆海子長谷川氏 /西川祐信、宝曆三年(一七五三)、秋田屋伊兵

載される。 来物大系 八十六』(大空社、平成六年)に別本が掲 (一七六三)、菊屋七郎兵衛、 ▼『女今川姫鏡』窪田つる/西川祐信、 千葉市美術館本。『往 宝曆十三年

## 2 西川祐信と中村三近子による共同制作

時代女性文庫

子 三九、菊屋喜兵衛)は三近子の注釈を付さない続編。 『絵本清水の池』 (最明寺殿教訓百首) 中村三近 『絵本池の心』(最明寺殿続百首、元文四年・一七 /西川祐信、享保十九年(一七三四)、菊屋喜兵

> 銭屋庄兵衛、東北大学付属図書館狩野文庫本(再版 保元年(一七四一)、再版=宝曆十三年(一七六三)、 本)。『国書総目録』に『一世宝要袋』とあるのは誤 ▼『女世宝要袋』中村三近子/西川祐信、 また『画人百人一首』(神宮文庫本) も同内容。 初版=寛

## 3 西川祐信と内藤道有による共同制作

『絵本千年山』玄同/西川祐信、元文五年(一七

四〇)、植村藤右衛門。

七四一)、植村藤右衛門 『絵本朝日山』源折江 / 西川祐信、 元文六年(一

祐信、 延享五年(一七四八)、植村藤右衛門 ▼『女朗詠教訓歌』内藤道有(晩香散人玉枝)/西川 『絵本花紅葉』内藤道有(晩香散人) 宝曆三年(一七五三)、植村藤右衛門、『江戸 百』(大空社、平成十年)掲載本。 /西川祐信

## 4 村三近子と内藤道有による往来物

三近子 (三近自画)、 『四民往来』中村三近子(絅錦斎中村平五)/中村 初版=享保十四年(一七二九)、

【享呆十四年版刊記】「享呆十四三酉暦九月吉日、帝十四』(大空社、平成五年)掲載の謙堂文庫本。十年(一七三五)、植村藤右衛門、『往来物大系 二文台屋治郎兵衛、国立国会図書館本。再版=享保二

師 柳屋庄兵衛」 通高辻上ル町 木村市郎兵衛、文台屋源治郎、彫工都書林、堀川通錦小路上ル町 文台屋治郎兵衛、同都書林、堀川通錦小路上ル町 文台屋治郎兵衛、同

本(狩野文庫マイクロ版集成、寛延三年版4-23本(行野文庫マイクロ版集成、寛延三年版4-2358、丸善)。再版=寛延三年(一七五年版4-2358、丸善)。再版=寛延三年(一七五年版4-2358、丸善)。再版=寛延三年(一七五年版4-2358、丸善)。再版=寛延三年(一七五年版4-2358、丸善)。再版=寛延三年(一七五年版4-2358)、植村藤右衛門、東北大学附属図保十五年版4-2358。

書用」。 成九年)に別本が掲載される。初版の内題は「一代成九年)に別本が掲載される。初版の内題は「一代59、丸善)。『稀覯往来物集成 十七』(大空社、平

書房 寿梓、 川光信、京師書坊 子、享保十五庚戌天七夕、 【寛延三年版刊記】「作者 【享保十五年版刊記】「作者 高麗橋一町目 江戸書坊 通石町三町目 堀川通高辻上ル町 植村藤三郎 洛之士 中村平五三近子、 摂陽画工 雒之士 植村藤三郎、 中村平五三近 柳翠軒 植村藤次郎 長谷

本

出店 郎 衛門 摂陽画工 青陽吉旦、京都書林 江戸出店 寿梓、 高麗橋壱町目 橘国保(ママ)・長谷川光信、寛延三庚午天 同出店 通本石町三町目 植村藤三郎 寺町通四条下ル町 堀川通高辻上ル町 植村藤三 郎 植村藤右 植村藤次

# ⑤ 橘守国と中村三近子・内藤道有による画譜

- ■『謡曲画誌』中村三近子/橘守国、享保十七年(一七三二)、藤村善右衛門、早稲田大学演劇博物館本(享保二十年の再版本)。刊記に「享保十七年壬子本(享保二十年の再版本)。刊記に「享保十七年壬子本(享保二十年の再版本)。刊記に「享保十七年壬子太坂本町北御堂前 毛利田庄太郎」とある再版本。大坂本町北御堂前 毛利田庄太郎」とある再版本。大坂本町北御堂前 毛利田庄太郎」とある再版本。
- ■『扶桑画譜』内藤道有(晩香散人内藤道有)/橘守

学附属図書館狩野文庫本、大阪府立中之島図書館術工芸大学附属図書館本(http://www.kanazawa-bidai 本.jp/tosyokan/edehon/main.htmにて公開)、東北大国、享保二十年(一七三五)、植村藤右衛門、金沢美国、享保二十年(一七三五)、植村藤右衛門、金沢美国、

#### Nishikawa Sukenobu and *Ehon* Illustrated Volumes-*Ôraimono* Copybooks: In terms of their connection with the history of scholarship during the first half of the 18<sup>th</sup> century

#### Yamamoto Yukari

Nishikawa Sukenobu (1671–1750), a painter active in Kyoto in the first half of the 18<sup>th</sup> century, was renowned for his printed books and also for his painted depictions of beauties. This article focuses on two issues related to Sukenobu's books, discussing issues in the background of picture production and the relationship of the books to the history of scholarship in the first half of the 18<sup>th</sup> century.

First, the article focuses on the illustrations that Sukenobu created for books written by the Japanologist specializing in court customs Tada Nanrei (1694/98–1750) and thus considers Sukenobu's joint work with Japanologists in the background of his picture creation. Nanrei was the great scholar of ancient court customs and was also renowned for his accomplishments regarding the study of the Nihon Shoki ancient chronicles. In terms of extant works, there are four types of ehon illustrated volumes created by Sukenobu in collaboration with Nanrei, namely Ehon Fukurokuju, Ehon Hana no kagami, Ehon Setsugekka, and Ehon Nishikawa azuma warabe. These works suggest that specific examples from Sukenobu's production of Hyakunin joro shinasadame compilation of beauty prints and paintings relied on the study of ancient customs as one of their image sources.

Second, the article considers the production of *ôraimono* in terms of Sukenobu's connection with other scholars, such as the Kyoto-based Confucian scholar Nakamura Sankinshi (1671–1741), and the author and print publisher Naitô Dôyû (dates unknown). Sankinshi, famous for his encyclopedic knowledge, wrote a number of morality tomes. The *Kokusho sômokuroku*, or general catalogue of books in Japan, lists some 34 types of works by Sankinshi. Dôyû is posited to be an alternate name for the Kyoto print publisher Uemura Tôemon, known to have published a diverse array of printed works, including *ôraimono* copybooks. Sukenobu participated in the publication of *ôraimono* copybooks through his work as an illustrator, and the illustrations he created became source material for his paintings. Further, Sankinshi and Dôyû edited and published *gafu* painting compendia with the Osaka Kanô school painter Tachibana Morikuni. The connection between these four men, Sankinshi, Dôyû, Sukenobu and Morikuni, also indicates that cooperative arrangements between scholars, publishers and artists on such projects as the *ôraimono* copybooks and painting compendia supported the publication of print books.

Sukenobu was active in the first half of the 18th century, and this was a time when published books were first being used in the education of the general populace. Sukenobu collaborated with scholars, and at the same time was an artist responsible for the dissemination of education through his provision of illustrations that suited the needs of the day.

(Translated by Martha McClintock)

電話 〇四三-二二一-二三一一(代) 三六〇-八七三三 千葉市中央区中央三-十-八二六〇十三三 千葉市教育振興財団 採蓮 第十号 二〇〇七年三月三十一日発行

Bulletin of Chiba City Museum of Art Siren No.10

March 31, 2007

Edited and Published by Chiba City Museum of Art 3–10–8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 JAPAN Phone. 043–221–2311

Produced by Insho-sha